
その喪失

ガムベース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その喪失

【NZコード】

N3320

【作者名】

ガムベース

【あらすじ】

友弘は、妹の麻里子にとつていい兄でいたいと願っていた。それは、妹との安穏な毎日にこの上ない幸せを感じていたからであった。

麻里子との散歩から帰ったところで、友弘は隣の家に住む少女、亜沙美に会つ。亜沙美は麻里子の同級生で、亜沙美家は彼女らが小学校にあがる以前に引っ越してきたのである。亜沙美と麻里子は仲がよく、自然と亜沙美と友弘とも面識ができていた。

亜沙美と二人で話すうちに、自分の知らぬ間に少女の清純さを失

いつつあつた亜沙美の姿を目の当たりにした友弘は、失意のまま帰宅し、いまだ無邪気な面影を残したままの妹に希望を求めるが、そこで、妹にも変化が訪れようとしていることを知ることになる。

麻里子の着替えを待つ間に友弘は、麻里子にうるさく言われていたのを思い出して、久々に髪を剃つた。剃刀は百円で三本も入っている安い安全剃刀を使つたが、友弘が考えていたよりはすっと切れ味が良かつた。友弘は、自分が髪を剃る最中に、間違つて頬の皮をそぎ落としてしまうことを予感していた。無事に髪を剃り終えたとき、友弘は自分の予感が外れたことに安堵した。

鏡に映つた自分の顔を見る。彼は自分の顔に、子供受けする要素を見出していた。それは物心ついたころからずつとそつだつた。彼の面立ちの持つそういう要素が、実際に何かの役に立つたということもしばしばあつたし、それをもつとも実感できたのが隣の家に住む亜沙美に対するときだつた。彼女は妹の麻里子の同級生で、まだ友弘流の下賤な言い方をすれば 男を知らない年齢だつた。友弘の家と麻美の家は低い塀で隔てられていて、しかし低い塀だからこそ小さな亜沙美の姿もよく見えたし、亜沙美からも友弘のことが見えた。友弘が隣家の生活の一部を覗くときには、必ずと言つていいほど彼の隣には麻里子がいた。友弘はその理由を二つ知つている。亜沙美と麻里子が同級生であることと、麻里子が友弘の妹であることだ。そのどちらも、友弘にとつては日常の一部を構成する掛け替えのないものだつた。

間隔を置いた弱いノックが二回した。友弘は蛇口をひねり、手に持つていた安全剃刀の刃に流水をかける。消しカスみたいな細かいものが陶器の洗面台を流れていき、渦に巻き込まれて消える。友弘は刃に水がぶつかる角度を変えながら、隙間に入つた髪を真剣に洗い流す。ドアを開けて入つてきた麻里子にTシャツの裾を引っ張られて、やつと妹の存在に気付いた。

「ちょっと、危ないよ」友弘は剃刀から目を離さずに注意した。「いま忙しいんだから」

「ねえ、私が何でここに来たか知ってる？」麻里子は澄ました顔で言った。

「お母さんについつも言われていると思つけどさ」友弘は麻里子の質問をまるつきり無視して、麻里子に言ひ聞かせる口調で言った。「お兄ちゃんはときどき、忙しいときがあるから、そういうときは邪魔しちゃいけないって」

「ねえ！」麻里子は背後で大声を出し、いつの強く裾を引っ張つた。「私が、何で、来たかわかる？」

「何でかつて？」内心うるさく思いながら、友弘は水道を止めた。安全剃刀を洗面台のわきに置いてあるカップに立てた。歯ブラシと一緒にだつた。「わかるもんか。誰だつて人の考へてることなんかわからぬもんだよ。お姉ちゃんが言つてただろ？」「ほら、向かいの家のお姉ちゃん……何だつけ、名前が出てこないけど」

「ちょっと、止めてよ！」麻里子はカップを指さして叫んだ。「剃刀を入れないでつていつも言つてるでしょう。私、何回言つたかしら」

「ああ……少なくとも」友弘は考へるふりをした。「五十回は聞いた覚えがあるね。僕はちゃんと数えてたんだ。うん、五十回だつたね、ちょうど」

麻里子は頬を膨らませて友弘を睨んだ。「私、夏休みの宿題の作文にお兄ちゃんのことを書くわ。私のお兄ちゃんは物忘れが激しいです。彼は可哀そうなことに……」麻里子は言葉を止めて、ちょっと呻吟したあと、小さな声で俯き気味に続けた。適当な文章が思いつかなかつたようだつた。「物忘れが激しいのです……」

「わかつた、わかつた」ため息をついて、剃刀をつまみ出し、カップの隣に刃を下にして寝かせた。刃が傷んでしまうかもしれないが、妹を泣かせるよりはましだと彼は思つた。「これでいいですか？」

麻里子お嬢様」

友弘は濡れた手をズボンで拭つと、洗面所を出て、ドアの横に立ててある帽子掛けに掛かっていた水色のキャップ帽を取つた。薄く

積っていた埃を払うと、それを、ぴたりと後ろに続いていた麻里子の頭に載せた。ツインテールが左右からはみ出したのを見て、死にかけのウサギを友弘は想像した。

「似合つてゐるよ。思つたとおりに

「お兄ちゃんは被らないの？」帽子をもつとも快適なポジションに置こうと苦心しながら訊いた。

「僕が？」友弘は目を見張つてじつと麻里子と目を合わせていた。やがて、下のほうに引っ掛けついていた白いキャップ帽 麻里子とお揃いだった を取つてかぶつた。

「どう？」妹を見下ろして、少しばにかみながら訊いた。

「似合つてゐるわ」と、麻里子は言つた。

「どうせ、お世辞だらう？」麻里子はお世辞の練習に世界一熱心な女の子だから」と口では言つたが、実際はまんざらでもなかつた。帽子を深くかぶりなおした。「いや、宇宙一かもしれない

「お世辞じゃないわ」麻里子はむきになつた。

家を出ると、日差しは、天気予報のキヤスターの言葉から想像していたそれよりもずっと強く、友弘は辟易した。丹念に磨かれた黒檀の机のようアスファルトは黒光りしている。遠くに煌めくものが見え、友弘は最初水溜りかと思ったが、それは逃げ水という現象だと思いだした。この知識は博学な 友弘から見ればの話だが

彼の妹、麻里子から得たものだつた。麻里子の顔を見やると、彼女もうんざりしたような顔をしていたが、ひたすら無言で歩いていた。強情な奴だと友弘は思つた。一人の前を、白地に黒ぶちの見たことのない野良猫が、驚くべき俊敏さで横切つていつた。その無表情に友弘は苛立ちを覚える。同時に、尊敬したい気持ちも起つた。

ふと思いついて、友弘は妹に尋ねてみた。「通りがアスファルトでなかつたらもう少しましんだつたのに、つて思つてる？」

「いいえ、そんなこと。ぜんぜん

麻里子はぶすつとした表情だった。家を出た時からそうだったと

友弘は心中で苦笑した。

「ちょっと暑いけど、こんなのどうないことないわ。だつてそういうでしょ？ 世界にはもっと暑い場所がごまんとあるのですもの」

「まんと、とこう表現に友弘は拍手したい気持だった。そして、彼女の言ひことはもつともだと思つた。友弘にとつて、麻里子は昔から自慢の妹だった。その気持ちがいつそう強まつた気がした。

一人はろくに言葉も交わさぬままに、牧場みたいに広大な住宅地を歩いた。両脇に立ち並ぶ民家が、それぞれ違つた強さで光を反射している。ときどき見受けられる、葉の青々と茂つた広葉樹が作る影は、兄妹にささやかな安息をもたらした。それは特に、妹にとつてはオアシスみたいなものらしかつた。帽子のつばのわきから覗く、彼女の安らぐ表情を見ることで、友弘も何となく気分が良くなつた。そうしながら、一人は歩き続けて、住宅地を抜け、小さな川に架かる小さな橋にさしかかつたところで足をとめた。

橋の上にくると、ちろちろと涼しげな音が、蝉の声に紛れてかすかに聞こえた。一人はコンクリート造りの橋の縁に立つて、三メートルくらい下を流れる川を見下ろした。手すりは友弘の腰の高さまでしかなく、熱射病になつて足元がおぼつかくなり、さらに妹が隣にいなかつたならば、きっととんでもない恐怖だつただろうと友弘は思う。川幅は五メートルくらいで、コンクリートによる平面的な護岸が施されていた。

麻里子は足元に転がつていたビー玉くらいの石を 友弘にはアスファルトのかけらに見えた 捨い上げ、橋梁から手を差し出して川に落とした。その動作の無造作なのに友弘は驚いた。妹は川を見ると無意識に石を落とすくせがあるのでしれない、と本氣で考えそうになつたほどだつた。目を川に移したころには、石は水の中に吸い込まれてもう見えなかつた。波紋が小さく広がつてゐるのだけが辛うじて確認できた。

「涼しいわね」と、麻里子は彼女の胸まである欄干に両腕を乗せて、空を見上げてうつとりとませた表情をした。「水が流れているだけ

なのに、いい気持になるわ」と、気取った口をきいた。

「馬鹿だな、川のそばだから、気温が下がってるんだよ」友弘は知つたかぶつて言つた。

「やつぱり！」麻里子は声をあげて、期待を込めた顔で兄に振り向いた。「どれくらい？　だいたいでいいから教えてよ」

「十度くらいかな」友弘は妹をがっかりさせないために、すかさず答えた。「もつとかもしれない。前に、本で読んだんだ。あの本はためになつたね」

「ふうん」と感心したように言つて、麻里子は正面に向き直つた。右足がとんとんと一定の周期で地面を蹴つてゐる。今度は、彼女は川面に目を向けていた。

水面が、季節外れのクリスマスみたいにイルミネートされている。おそらく妹はそれに見とれているのだと友弘は思つた。友弘自身も、川面に反射してまたたく光は綺麗だと思つた。ずっと見ていきたい気分だつた。

「やつぱり暑いわ」しばらくすると、観念したふうに麻里子は深く息を吐いた。「帰りましょうよ？」

「いい考えだね。僕もそう言おうと思つてた」

友弘を見てにっこりと笑つと、麻里子は駆け出した。背丈がラムネのビンぐらいになつたところで立ち止まり、振り返つて手を振る。

「おーい」と、麻里子の声が聞こえた。友弘も手を振り返した。

友弘は麻里子の表情や仕草をいちいち観察しながら、わざとゆっくりと歩いた。麻里子は待ちきれないというよな、しきりに貧乏ゆすりをしていた。普段あまりしない所作だったので、彼はちょっとだけ満足感を得た。十秒に一度くらい、麻里子は友弘の名を必要以上に大きな声で叫んだ。

友弘が麻里子に追いつくと、麻里子は待ちたくだびれたとでも言いたげな表情で　しかし彼女は何も言わなかつた　普段よりも少しだけ速足で歩きだした。友弘は歩調を上げて、麻里子の歩きたいペースに合わせる。二人はどちらからともなく手を取つて、汗ば

んだ手のひらを合わせた。

帰り道、日差しはいつそう強さを増していた。往路は風流を感じた蝉の声が、だんだん耳触りになっていた。妹と繋がった左手がぬるぬると汗で滑り、位置がずれるたびに握り直さなければならぬのが少し煩わしかつたが、手を離そうとまでは考えなかつた。額から滲み出た汗の玉が大きくなつて流れ落ち、それが目に染みた。住宅地が見えるころになると、暑さのためか、頭に振り回されるような不安定感を友弘は覚え始めた。しかし、妹の手前それを表に出すこともできず、必死に堪えて平気なふりをしていた。妹は平気なのかと隣を見やれば、彼女は平然とした顔を帽子の下から覗かせているばかりだつた。友弘はいらいらしてわざと大きなため息をついた。妹にも聞こえる大きさで吐いたつもりだつたが、彼女は微塵の気遣いも見せず、友弘を無視していた。その態度が友弘には信じられないほど冷淡に思えて、なお彼の神経は苛立つた。煮えるような暑さだけでなく、妹からの仕打ちにも友弘は耐えなければならなかつた。

一人は自宅の門をくぐつた。隣の家で、道路に面したところの植木に向かつて、水撒きをしている少女の姿が見えた。大きな麦わら帽子を目深にかぶり、顔はほとんど影になつていた。彼女はオレンジのワンピースを着ていた。ホースを強く押さえすぎているのか、水しぶきが霧のようになつて少女にかかつていたが、少女にはかえつてそれが涼しいらしく、口元には微笑さえ浮かんでいた。妹が彼女の姿を見つけて、「亜沙美ちゃん！」と大きな声で少女の名前を呼んだ。少女はこちらを振り向いた。

「じきげんよう」と、ホースを手に持つたまま亜沙美は氣取つた調子で言った。

「じきげんよう…

亜沙美ちゃん」妹は急に手を離して飛び出して

「お兄さんもこんなにちは」亜沙美が顔を友弘に向けた。妹にはでき
そうもない上品な笑顔を、亜沙美はいとも簡単に作つてみせた。

友弘は悪戦苦闘して、暑さに引き攣る顔をなんとか笑顔に作り替
えた。「こんなにちは」

「暑いですね、お兄さん」彼女は妹ではなく友弘に話しかけた。
「ええ、本当に。水やりかい？」そう訊いてから、見ればわかつ
る当たり前のことだと気づいて後悔した。

ええ、と相手は答え、とつておきともいえる笑顔を見せた。友弘
は彼女の手元が気になつて仕方がなかつた。亜沙美の細い指が一生
懸命にホースの口を狭めて、水を拡散させていたのだが、ホースを
持つた右手が、さつきから同じところを往復している。地面に水溜
りができかけていて、友弘は落ち着かなかつた。

「亜沙美ちゃん、これから遊ばない？」と、妹が言いだした。

「いいわよ。でもちょっと待つて、お母さんに水撒きを頼まれてる
の」やつと仕事を思い出したように、ホースの先を新しい土地に移
動させた。

「そろそろお昼だから、家に入ろう」友弘は妹に向かつて言った。
「お昼を食べてから心ゆくまで遊べばいい。まだこんなに明るいん
だから」

麻里子は、彼の提案を承諾して、友人と別れの挨拶を交わして玄
関に消えた。友弘も一言だけ挨拶を残して、妹に続いて家に入った。
ろくに歩いていないはずなのに、足が鉛みたいに重かつた。洗面所
に向かう妹の軽やかな足音が聞こえた。

昼食のサンドイッチを食べ終えると、妹はコップに残つていたオ
レンジジュースを一息で飲み干して、どたばたとすぐに出で行つた。
友弘はそれを横目で見ながら、自分のコップの中身を堪能していた。
それは濃厚な、アイスミルクだった。

ランチタイムがお開きとなると、友弘はカップをミルクで満たし、
氷が五個浮かべて、それを持って自室に向かつた。一歩歩くごとに

氷がガラスとぶつかって高い音を立てた。コップの表面に付いた水滴が、指を伝つて足元に垂れたのを、わざと踏みつけながら歩いた。ドアを開けて、通りに面した窓のそばに寄つた。向かいの家が見えた。庭で犬と戯れている女性の姿があつた。彼女の顔は頻繁に見るが、名前を友弘は思い出せない。小さかつた頃はその女性によく面倒を見もらつたらしいのだが、彼はそのことも覚えていなかつた。

カップを傾けてミルクを一口飲んだ。それを窓際にある勉強机の上に置いて、その隣に自分も腰かけた。机に座るのは久しぶりだつたので、懐かしい、小学生に戻つたような気分になつた。自分が小学生のころのことは覚えていないが、小学生である妹がたまにやつていることなのだ。友弘の部屋でも、友弘が見ていないと麻里子はいつの間にか友弘の机に腰掛けていることがある。それは妹の悪い癖だと友弘は思つていた。また一口ミルクを飲んだ。

再び外を見ると、向かいの家の庭から女性の姿が消えていて、犬もいなくなつていた。

友弘は机から降りて、窓を開けると、顔を出して周りを見渡した。隣の家庭で縄跳びをしている麻里子と亜沙美の姿が見えた。亜沙美が跳ぶたびにワンピースの裾が翻り、花びらみたいだと友弘は思つてじつと見ていた。無防備に露わにされた彼女の足は、病的なまでに白かった。妹はどちらかというと色黒だったので、比べてみると違ひがはつきりわかつた。よく見れば、亜沙美の肌は全体的に、あまり日に焼けていない色をしている。外に出ていないわけではないことを友弘は知つていたので、もしかしたら白人の血が混じつているのかもしれないと思った。

窓を開けたままにして、友弘は勉強机から降りると、帽子の一つ足りない帽子掛けから、さつきと同じ白いキャップを取つてかぶつた。洗面所で自分の姿を鏡に映してみる。帽子の角度が気に入らなかつたので、念入りに調節した。

友弘が家を出ると少女二人は縄跳びを止めていて、並んで縁側に

腰かけていた。友弘が声をかけるよりも前に、亜沙美が友弘に気付いた。

「あー、お兄さん」首をかしげるようにして友弘に顔を向けた。その拍子に、セミロングの髪がさらりと揺れた。

「やあ、暑いね」笑いながら、自分はまた同じことを言っている、と呆れた。「縄跳びをしていたの？」

「見ていらしたの？」亜沙美は訊いた。

「いや、縄を手に持っているから」友弘は弁解した。それから、「僕もそつちへ行つていい？」と訊いた。

「どうぞ」と亜沙美は答えた。

地面が湿っていたので、亜沙美の家の庭は、友弘の家の庭よりも涼しかった。友弘は妹の麻里子の隣に座った。亜沙美は麻里子の向こうから前かがみに顔を出して、「いらっしゃい」と言った。

麻里子は亜沙美にしきりに話しかけていて、亜沙美は嫌がることなくその相手をしていた。友弘は二人の会話に耳を傾けながら、地面を行進する蟻の隊列を見守っていた。一人の少女のどちらかの足が彼らを踏みつぶそうとしたら、足を下ろさないよう注意しようと考へた。隣に座る麻里子のサンダル履きの足は、砂が付いて粉をふいたようになつていた。彼女は半ズボンだった。その向こうにも一本の白い棒が伸びていた。蟻は四本の棒のすぐ前を、恐れるものなど何もないかのように悠然と行進している。

亜沙美が突然立ち上がり、「何か飲み物を持ちてきますね」と言った。

「お気遣いなく」

「いいえ、こんな暑いんですもの。干からびてしまつわ。

麦茶

でいいかしら」

「じゃあ頂こうかな。君の持つてきてくれるものなら、何でもいいよ

亜沙美は照れたように微笑むと、家中へ消えた。麻里子は名残惜しそうに麻美を見送っていた。友弘はその横顔を気づかれないよ

うに盗み見ながら、思わず麻里子の髪に指を差し入れていた。そのとたん、麻里子の肩が大きさに跳ねた。

「ちょっと！」怒ったように友弘の手を払いのけた。「やめてよ」「汗をかいているじゃないか」汗ばんで湿り気を帯びた髪の感触が、友弘の手にまだ残っていた。「タオル持つてこようか、亜沙美ちゃんが戻ってきたら」

「お気遣いなく」と、麻里子は兄の口真似をした。「おあいにくさま。ハンカチを持っているわ」

亜沙美が盆にコップを三つ載せて戻ってきた。

「お待ちどおさま」

亜沙美は麻里子の横に座つて、一人にコップを手渡してから、自分も一つ取つて、真っ先に口を付けた。それが友弘には予想外だったので、まじまじと亜沙美の顔を見つめてしまった。亜沙美の目が一瞬だけ友弘と合つたかと思うと、亜沙美は瞬間に頬を赤らめて、コップを置いてしまった。

隣に座る麻里子は、コップに口を付けたり離したりしていた。麦茶が通るたびに蠕動運動する麻里子の喉を見て、友弘はカップを両手で持ち直して、膝の上に置いた。麻里子は友弘が見ているのも気づかずに、あるいは、気づいてはいてもお構いなしに、無我夢中で飲み物を飲んでいた。

目の前の道を、犬を連れたボニー・テールの女性が通り過ぎるのを見た。前の家に住む、名前のわからない人だ。犬は舌を出して過呼吸氣味だった。ジーンズにくつきりと、足のライン、ヒップのラインが浮き出ていた。隣に座る少女たちと体形を比較することは、どちらにとっても失礼だと思った。友弘は口を付けていないコップを自分の右手に置くと、蟻の行列に顔を近づけて、両膝の上で腕を組んだ。一人の話し声をBGMにしながら、友弘は目を閉じて、左足をゆるやかに上下させて陶然とした。

麻里子に肩を叩かれて我に返った。友弘はとっさに足を組んで、羞恥をこまかすために右手でコップを取つて麦茶を飲んだ。口を付

けたまま、田で応答する。

「私、もつ帰るわ」

友弘はあっけにとられた。

「その田はどういう意味？」無言でいる友弘に、訝しげに麻里子は顔を近づけた。

友弘は組んだ足の膝の上に空いている左手を載せて、そのままの姿勢で答える。「どうして？ 用事でも思い出した？ 宿題とか」「まあそんなところ」言いながら、麻里子は立ち上がった。反射的に友弘も立とうとしたが、思い直して腰を下ろした。

麻里子が一步踏み出し、足元の蟻はあっけなく踏みつぶされた。ばいばいと言い合つて、少女たちはあっさりと別れた。麻里子は友弘の目の前で、行儀の悪いことに、我が家に帰るのに壆を乗り越えて行つたのだった。友弘はその光景を初めて田にして、妹のあまりにもやんちゃなのに面食らつて、はしたないと咎めよつても言葉が出てなかつた。

「いりして一人で並ぶのは久しぶりですね」と亜沙美は唐突に言った。

真ん前を見たまま「そうだね」と答えたが、実のところ、思つてもみなかつた顛末に友弘はひどく狼狽していく、そのときは声を出さうだけでも精いっぱいだった。

「私お兄さんと一人でお話がしたかったの」と、亜沙美。

「そう」たつた一文字をゆっくりとつぶやくと、友弘はやつと亜沙美の顔を見ることができた。さらに、一度深く息をして、冷静さを取り戻そうと努めた。「それは、光榮だね」

「もつと何かおつしやつてよ」そうして、じぶし一つ分友弘に体を寄せた。「私、本当にお話をしたいのです」

「なぜそんなことを言つのかな？」

「麻里子ちゃんがお家に帰つちゃつて、つまらないのよ」

「呼び戻すか？」亜沙美の真ん丸な目と、ほのかに上氣した頬の色を見ながら友弘は訊いた。「どうせ宿題なんかしてないだろうじ。

あいつはね、いつも夜になつてからノートを開くんだよ。僕の知る限りでは、例外なくそうするね」

亜沙美はけらけらと笑つた。「あら、私もですわ」それから、「でも、せつかくご本人がやる気になられたのですし、やっぱり邪魔しちゃ悪いわ」と殊勝な言葉を加えた。

妹のことを「じ本人」と言ったことに、友弘は吹き出しそうになつた。

「いいのです。たまにはお兄さんとお話したいわ」亜沙美は顔を伏せた。うなじがちらりと覗いて、友弘はじきつとする。

何を話そうか迷つた挙句、「学校の調子はどう?」と友弘は訊くことにした。

「相変わらずです」亜沙美は顔を上げ、友弘に顔を向ける。そして、穏やかに細めた目で友弘を見る。「お勉強つて難しいわ」

「妹と同じクラスだよね。宿題があるみたいだけど、亜沙美ちゃんは大丈夫なの?」

「あら、私言いませんでしたっけ」亜沙美はわざとらしく目を丸くした。「麻里子ちゃんとおんなじ。夜になつたらやるのよ」

「簡単なもの?」

「算数の問題集」亜沙美はくすくすと笑つた。それがいかにもいたずらそうな感じで、同じ歳の妹との共通点だった。この年頃の少女の、その笑い方は、一人の例外なく可愛らしいと友弘は思つてゐる。

「何ページ?」と、友弘は訊いた。

「三ページ」

「なんだ、すぐに終わるじゃないか。亜沙美ちゃんなら三十分くらいかな」正直な予想を言つてみた。「要するに、一ページあたり十分というわけ」

「そんなものかしら」

「亜沙美ちゃんは、算数は得意なんだろ?」

「普通よ」

「麻里子なんかぜんぜん駄目だ」友弘は微笑んだ。「あいつ、いつ

もテストを隠してやがるんだ」

麻里子の皿が一瞬だけ、友弘の膝に落ちた。そこにある友弘の左手を見たらしかつた。「あら、そうなのですか?」ちょっと身を引いて驚きを表現したあと、彼女はわざとらしく笑つた。

友弘はもう一度、「麻里子を呼んでこようか?」と訊いた。亜沙美はすぐにかぶりを振つた。

「いいじゃありませんか。こうしているの、とっても楽しいわ」

「僕もそう思うよ」友弘は初めてコップに口を付けた。それを見て亜沙美もまねしたように麦茶を飲んだ。友弘は亜沙美よりも先にコップを置き、彼女の喉の動きを見ようとしたが、止めた。彼は組んだ足を下ろした。

そのとき、部屋に置きっぱなしのミルクが急に気になり始めた。もう氷は残らず溶けてしまつただろう。なぜか、いても立つてもいられない心地になつた。もしかすると、麻里子が見つけて飲んでしまつただろうかと想像する。

「麻里子ちゃんは足が速いのよ」と亜沙美は言つた。「昨日、体育の時間に駆けっこをしたのですけれど、麻里子ちゃん独走でしたわ」「亜沙美ちゃんは?」

「わたくしは」その一人称は初めてだつた。「運動オノチです。もうまつたく駄目なの。ゼーんぜん」

亜沙美は後ろ手をつき、体をのけ反らせ声を立てて陽気に笑つた。友弘は目を丸くしてそれを見ていた。亜沙美はまるで酔つてもいるかのようだつた。筋張つた色白の喉元が露わになつていた。

「亜沙美ちゃんは足が細いね」友弘は彼女の足に目をやる。

亜沙美は笑うのを止め、足を揃えて置き直した。

「あら、そうですか?」

「それに色白だよね」

亜沙美は急に艶めかしさの漂つ表情をして、両足を縁台に載せると、体を友弘に向けて体育座りの格好になつた。オレンジの隙間から白いものが覗いた。「そうですか?」内緒話でもするかのように

彼女は囁いた。井戸の底を思わせる真っ黒な瞳で、上目遣いに友弘を見据える。暴力的な籠絡を求めるような表情に、友弘は思わず息をのんだ。

「私、日に焼けないので。どんなに外で遊んでも」「そなんだ」

「麻里子ちゃんみたいな肌が健康的で羨ましいわ」

「女の子って色白に憧れるものじゃないの？」起伏のない胴体から伸びた、一本の下肢の間に視線を向けたまま、友弘は尋ねる。「もつとも、麻里子はその手のことは気にしていないようだけれど」「いろいろよ。日に焼けにくい子なら、色黒の肌に憧れることだってあるわ」彼女は自分の膝に顎を乗せた。

友弘は、自分の見つめる先に、隣の少女が気づいていないわけはないと思った。

「そろそろ帰らないと」と、友弘は言った。

「どうしてですか？」亜沙美は不安な表情を隠しもせず、むしろ見せつけるように、人形めいた顔で感情を表現した。体育座りを解き、膝立ちの格好になつて、友弘に顔をぐつと近づける。帽子のつばとつばが触れた。「まだお口様はあんなに高いのに？」もつお帰りになるの？

「妹の宿題を見てやるうかなと思つて。絶対に遊んでるから、あいつ」

「わたくしにも宿題を教えてくださらない？」それから一秒ほど間をおいて、亜沙美はぽんと手を打つた。「そうだ、麻里子ちゃんと、私と、三人でやりません？ 私の家で」

「いや……」友弘はうまい返答が浮かばない。「たまには、その…

…

「兄妹水入らず、ですか？」

「そうだね……」羽虫を追うように友弘は目を動かす。「うん、そんなんところだね。これは……家族として大切なことだと思うんだ。誕生日のパーティと同じくらいに。君だってそう思うだろ？…」

「ええ、思います」亜沙美は姿勢を戻し、友弘と平行になつて縁側から足を下ろした。「お兄さんの言つとおりです。どうも私、少し厚かましかつたみたい」

「そんなことはないさ」横田で亜沙美を見るが、彼女は友弘を見ていなかつた。「まあ、ちょっとくらい厚かましくても、子供はいいと思うけどね。もちろん亜沙美ちゃんはこれっぽっちも厚かましくないのだけれど、そのつまり、一般論として」

「そうですわね」聞いているかいないかわからない、氣のない声だつた。

「じゃあ、その」

「お帰りですね」亜沙美は靴をつっかけて立つた。「お家までお送りいたしますわ」

亜沙美は友弘の前に立つて手を差し伸べた。一瞬躊躇したが、結局彼はその小さな手に自分の手を載せた。妹の手とは違つて、汗はほとんどかいていなかつた。

部屋に戻り、キャップを脱ぐと、そのまま帽子掛けに引っ掛けた。妹の水色の帽子は元の場所に戻してあつた。彼の忘れていたコップは、中身を残したまま、部屋を出る前と変わらず勉強机の上に置かれていた。氷はすべて溶けていて、滴り落ちた水滴がコップの足元に水溜りを作つている。友弘はそれを乱暴につかむと、残つていた中身を一息で飲み干した。

慎重に、割らないように、握りしめたコップを机に戻す。友弘は急に力が抜けて、そのままベッドに座りこんだ。

「お兄ちゃん、帰つたの？」ドアの外から麻里子の声がした。「ただいまくらい言つたらどう？」

「ただいま」友弘はぞんざいに返事をした。

「おかげり

友弘はすぐに麻里子がドアを開けて入ってくるものと思っていたが、その気配はなかつた。思つていたというより、彼は期待していたのだ。だからほんの少し、失望した。

先刻まで話していた少女が時折見せた、人を獲つて食いでもしそうな表情を思い出しては、友弘は身震いした。そうしていると、彼女と同じ年齢の、妹のことが気がかりで堪らなくなる。立ち上がり、自分の部屋のノブに手をかけるも、その手が震えていることを見て、ノブを離す。そしてまたベッドに戻り、縁に腰かける。そんなことを何度も繰り返していた。

亜沙美がいつの間にか大人の女性に近付いている もしかしたら、憧れて真似をしているだけかもしれない。だが、どちらにせよ、それは大変なことだ。彼女自身が気づいているかどうかはわからないうが、たとえ自覚していたとしても、本人の想像している以上にそれは大変なことなのだ。一度と取り返しのつかないことなのだ。友弘は、自分の心が光の届かない絶望の淵に徐々に沈んでいく感覚を覚えたが、それでも、いまの彼にはそうして沈み込むがままにしておくほかはなかつた。傍観することしか許されない自分の無力さと、時間というものの無情さ、そして、それに抗うことのできない抗おうとすらしない、あらゆる影響を限りなく自然なままに受け入れようとする少女の魂の清純さを嘆いた。

友弘は上半身をベッドに倒して、仰向けになると、天井を見るのが嫌で目を閉じた。明りが入つてくるのも鬱陶しくて前腕で光を遮つたが、彼の求める暗闇はどうしても得られなかつた。濡れた瞼を隠すことしかできなかつた。

「お兄ちゃん、入つていい？」遠くのほうから麻里子の声が聞こえた。幻聴かと思つたほど控えめ声だつた。「お兄ちゃんの考えていることを当てるわ……。部屋に入つていいかどうか断わるなんて、珍しいと思つてゐる」その声は、耳元で囁くみたいな、からうじて聞き取れる大きさだつた。

「正解だよ」

彼が答えるとすぐ、ドアをそつと開ける音がして、続いて心臓の鼓動と同じくらいの足音がして、誰かの体温が空気から伝わってきた。友弘は瞼が乾くまで、腕を顔に抑えつけていた。

「ねえ」何度も呼びかけて友弘が腕をどけると、麻里子の顔がすぐそばにあった。ベッドに乗つかって、彼女は友弘の顔を真上から覗きこむような格好だった。「どうしたの、亜沙美ちゃんと喋っていたはずなのに？」

「もういいんだ」ふとするとまた涙があふれそうだったので、声の出し方にも気を払わなければならなかつた。「別れてきた。あの子も宿題が忙しいって言つてたから、そうした」

「ふうん」麻里子は友弘の隣に正座すると、寝転がる彼の髪を細い指先で、退屈そうにもてあそび始めた。

「麻里子、僕らと亜沙美ちゃんとはどれくらいの付き合いだつたつけ」

「私が幼稚園のころから」麻里子は友弘の髪を指に巻きつけながら答えた。「亜沙美ちゃんちが、そのころ引っ越してきてたつてお母さんに聞いた。でも、そのことは絶対にお兄ちゃんのほうが詳しいわ。だつて私はそのころまだ三歳だから」

「そうだね」友弘は妹の顔を見る。彼女も友弘を見ている。「もちろん自分で知つてたさ。麻里子を試したんだ」彼は頭にくすぐつたさを感じた。妹がつまむ髪の量を増やしたのだ。

麻里子と話していると、いつまでも、何時間でも何日でも何年でもそうしてしまって、その気がする。それが限りある貴重な時間の浪费だといつことはわかつていたが、わかつてもなおこつして他愛ないお喋りだけで無為に時を過ぎてしまいそうだった。

何の底意もなくただ純粋に言葉を返してくれるのは、友弘にとてもはや妹だけだった。少なくとも彼はそう感じていたし、彼にとっては自分がそう感じたという感覚だけしか信じるところはなかつた。

「亜沙美ちゃんは、お兄ちゃんのことが好きなのよ」何の前触れも

なく、麻里子は親友の秘密を暴露した。「ずっと好きだったんですね。それはもう数えきれないくらい昔から、ずっとそうだったのよ」

「やつぱり」友弘はできるだけ何気ない調子で呟いた。「何となくね、そうじやないかつて思つてたんだ。さつきだつて」

「またウソ?」彼の言葉を遮つて、麻里子は口を開いた。その声はいくらか冷たかった。「……お兄ちゃんはいつでも嘘ばっかり言うから」

「嘘じやない」彼は主張したが、妹が自分の言葉を信じたとは思つていなかつた。

しばらく友弘と見つめ合つたあと、妹は「ねえ、こいつのつて、ばらすべきじやなかつたのかな?」と当たり前のことを、まるで無邪気に訊いた。彼女の表情は、どことなく笑つてゐるよつと友弘には見えた。

思いがけない場面で笑つのも妹の特徴なのだと友弘は思つ。昔、友弘が部屋で本を読んでいたときに、隣で突然忍び笑いを始めた妹の横顔が浮かんだ。麻里子がそのとき何を考えていたのかはづつと謎だつた。彼にとって、妹はとにかく考えていることが見えない。妹の思考は、彼女が喋つてゐるときでも、黙つてゐるときでも、友弘はいまだに満足に推し量ることができない。この先もきっとそううだらうと、彼は、相互的な意思疎通の不可能を受け入れていた。質問に答えない友弘の言葉を待つて、麻里子はお預けをくらつた犬みたいにしばらく黙つていた。彼を見つめる妹の眼のあまりに丸いのに、友弘は思わず目を反らしそうになつた。人形にはめられたガラス球と何ら変わらなく見えるそれは、その輝きのあまりの純粋さゆえ、ただ見つめられてゐるだけで心の深くに仕舞い込んだ感情を無理やり引きずり出されるような恐怖を友弘に与えた。

「そう言えば、机にミルクが置きっぱなしになつたわ」やがて彼女は諦めたように、話題を変えて話し始めた。

「それなら、さつき飲んだよ」

「薄くなつてたのに、飲んだんだね」

「だつてしようがないよ、放つて置いたんだから。僕が忘れてたんだ」友弘はまともに話そつと思い、上体を起こして妹に向かた。

「そういうのを自己責任つて言つらしいね」

「それも、向かいの家の姉さんが言つてたんでしょ」妹は友弘の隣に位置をすらして、横から見上げるような姿勢になつた。「雅代さんだつけ」

友弘は一瞬言葉を失つた。きょとんとする妹に向かつて、興奮しながら言つた。「そう、そう。雅代さん」

「雅代さんがどうしたの」

「いや……何でもないんだ、じつちの話」やつは言つたが、雅代の名前が頭から離れそうになつた。「ところで雅代さんつていくつだけ。僕は昔、よく遊んでもらつていたらしいけど」

「知らないわよ」麻里子は怒つたように答える。「自分で考えたほうがいいわ」

「昔のことはあまり覚えてないんだ」友弘は妹の機嫌を損ねたくない、言い訳をした。「だつて、いまだつて、僕らはほとんど昔と変わらないだつ？」

「あら、そんなことないわ。どうして？」妹は不思議そうに首をしげた。「私だつてお兄ちゃんだつて、昔に比べたらずいぶん変わつたと思つわ」

「いいや、そんなこと……」友弘は言葉に詰まる。「でも、変わつたつて、嬉しくないだつ。僕は、忘れたんだ。とにかく昔のことはね……。そりやあ昔のほうが、いまよりも何もかもずっと良かつたと思つた。だけど、それとこれとは違うだつ？　お前ももう大きいからわかると思つけど、僕の言つことが」

「わからないわ」麻里子はつっけんどんに言つた。「それって矛盾してるわ」

「してないよ。　ともかく、意味もわからないくせして、矛盾なんて、そんな難しい言葉を使うのはやめろよ」

「意味はわかつてゐる！」麻里子はいきなりどなり散らした。「昔なんて何も知らないくせに、何一つ覚えていなくて、偉そうなことだけ言つて！」

そう言つて麻里子は、自分のすぐ横にあつた友弘の手に平手を振りおろした。爆ぜるような小さな音が鳴つた。驚いて友弘が手を引つ込むと、今度は友弘の胸をこぶしで殴る。麻里子は唇を固く結び、瞼に涙をためて、何度も何度も友弘を殴つた。

「何でそういうことをするんだ」友弘はわけがわからなかつた。からくり人形みたいに同じ動作で胸板を殴りつける妹を前に、彼は困惑して、どう対応していいかわからない。「そういうところが子供だつて言つんだ、麻里子は。ぜんぜん昔から変わつてない……本当に……」

「どうしてそんなこと言つのー」暴れる麻里子を抑えようとする、友弘の手に、零が落ちた。「お兄ちゃんだつて、すぐ変わつたのよ。違う人みたいになつた。亜沙美ちゃんにはもつと、優しかつたし……」麻里子はそこで一旦言葉を止めた。「私にはもつと冷たかつた」彼を殴る動きもぴたりと止んだ。

それきり黙りこんで、麻里子は肩を震わせていた。髪の毛を縛つているヘアゴムがいまにも解けそうなのを見つけて、友弘はそれを縛り直した。一度と解けないよう念入りに、何重にも巻き付けた。そうしながら、妹の言うような記憶を必死に手繰ろうとしたが、何も得られなかつた。自分が変わつたのはこういつた部分なのだろうか、という結論に彼は至つたが、それすら何か違うような気がした。一度荒れ模様になつてあとは泣くばかりの妹を見守りながら、友弘の口をついて出たのは、「麻里子は、早く大人になりたいかい？」という言葉だつた。彼は言い終えるや否や、はつとして口をつぐんだ。ひどく恥かしいことを言つた気がしたのだ。

麻里子は、うつん、とゆっくり首を横に振つた。それが本当か嘘かは友弘には量りかねたが、妹が自分を想いやつてくれたことだけは理解できた。妹は顔を伏せたままだつた。こちらに顔を向けてく

れたらどんなに幸せだろう、と彼は思う。

「亜沙美ちゃんは、僕の知っている亜沙美ちゃんじゃなくて、どこか不安定で不自然で、作り物みたいだった……作りかけの粘土細工みたいに、とても不格好だった。僕は、麻里子には、いつまでも麻里子の今までいて欲しいんだ。そうでないと、きっと、麻里子のことを僕は忘れてしまうから……」

麻里子は友弘の胸に頭を埋めて、「亜沙美ちゃんがお兄ちゃんのこと好きなのは、本当よ」と、まだ震える声で言つた。「だから、亜沙美ちゃんのこと、忘れないであげてね」

その約束に頷く自信は、友弘にはなかった。

なぜ美しいものは美しい今までいられないのだろう。いてはいけないのだろう。

亜沙美はすでに、少女だった亜沙美の面影を失いつつあり、同時に亜沙美にとつての友弘も、もう昔の友弘ではなくなりつつあることを、友弘は知ってしまった。亜沙美の変化は、彼女自身だけなく、少女だった亜沙美の中に存在した友弘の死さえも意味している。それどころか、彼女の持つていた世界はすべて留まることなく変化を続け、いつかは完全に消えてなくなり、まったくの別物になつてしまふのだ。同じ朝が、二度と来ないと同じように。そして朝よりもずっとうつろいやすぐ不安定なものこそ、みながそれぞれに持つてゐる世界なのである。ことに少女の世界は染まりやすく、穢れやすいものだ。

しばらくして、嗚咽もすすり泣く声も聞こえなくなつた。まだ目の赤い麻里子を部屋に送ると、友弘は自分のベッドに戻つた。麻里子の残り香に顔をうずめながら、彼は来るべき睡魔に意識を委ねる。自分が目覚めたとき、妹はどんな顔をしているだろう。自分はどんな顔をして妹に会つだろう。未来を想像することは友弘にとつて恐ろしいことでしかなかつた。だが、目が覚めたら自分はもつと冷静でいて、恐怖も薄らいでいるはずだ。そういうことが自分の抱く恐怖の実態なのだろうと、意識の消え入るうとするさなか、友弘は

考
え
る
の
だ
っ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3320/>

その喪失

2010年12月6日11時55分発行